

ラブレターのおくりさき

森 要

レンガ造りの駅舎から出た瞬間、春が薫った気がした。わずかに土の匂いが混じるのは風に乗った花粉だろうか。目に走るかゆみをなんとか誤魔化そうと何度かまばたきをして、スマートフォンの時計を見る。ロータリーに停まっているはずの大学行きバスの出発までもう時間がない。急ぎ足でロータリーまで続く階段を駆け降りる。同時にバッグからバスの定期券を引っ張り出し、おくのことも忘れない。一段降りることにコンクリートの壁にブーティの靴音が反響するのを心の端っここのほうで恥ずかしく思いながら、わたしはようようバスに飛び乗った。

『おはよう、瑛君はもう起きてる？』

わたしは今ちようどバスに乗ったトコ。

もう、乗り遅れちゃうと思ったよ。

学校に来たら、メールください』

新しい季節を迎えたといってもこの時期の朝はまだまだ肌寒く、バスの中はよく暖房が効いていた。その暖かな心地よさの中、わたしはいつものように瑛君にメールを送った。最初は朝の苦手な一人暮らしの彼のために目覚まし代わりに始めたことだったのだけれど、最近はどうもめつきり効果が薄れてきてしまっている。きつと今頃、彼は手探りでスマートフォンをマナーモードに切り替えているのだろう。その姿を想像すると自然と、頬がゆるむ。

窓から見える街路樹を尻目にスマートフォンをバッグにしまい、代わりに一枚の紙を取り出す。本当なら今読んでいる小説の続きが気になっているのだけれど、今のわたしにはこの一枚の紙切れのほうが大事だった。

『倉野小町恋文賞応募要項』という文書がわたしのものとやって来たのは先週のことだった。

所属している文芸サークル宛に届いた倉野小町恋文

賞のチラシは全国の大学の文芸部に送られているらしく、例外なくうちのサークルにも送られてきた。そこでそのチラシの内容を面白がった先輩の何人かが部員全員に応募要項を渡してきて今に至る——というのが一連の流れだろうか。

手元にある『倉野小町』という名前に溜息をつく。

この賞の主催元の倉野小町市は私の姉が住んでいる所だ。四年前に結婚した彼女は旦那さんの仕事の都合で他県に引っ越している。出産を間近に控えた身であるため、最近はわたしの家に帰ってくることもなく、もう一年以上姉とは会っていない。倉野小町恋文賞のチラシを家のリビングに放り投げていたのを家族に見つかつたところ、きつと何かの縁よ、とわけの分からないことを言っただけで母親は嬉々としてわたしに投稿するよう薦めてきたのだった。

『次はー〇×大中央口、〇×大中央口』』

一番の問題はというと、困ったことにわたし自身がこの話の結構乗り気だということだ。バスの運転手のアナウンスが車内に流れ、わたしは溜息をもうひとつついてポケットから定期券を取り出した。

\* \* \*

瑛君からのメールが届いたのはお昼を過ぎてからのことだった。液晶画面に浮かんでいる「おはよう」という言葉に首をかしげる。

一日のうちで一番込み合う時間帯を過ぎてしまったせいか、大学の食堂はもうずいぶん人がいなくなっていた。その開放的な広い学食の一番奥の窓際に見慣れた背中を見つけて、私はポケットからスマートフォンを取り出した。

『やあ』

メールが届いたことに気づいたのだろう、すぐに彼の背中がもぞもぞと動き周りを見渡す。彼の目がエントラ

ンスに立っているわたしを見つけると、彼はにっこりと笑って手を挙げわたしを呼んだ。

「さすがにもうちよつとくらい早く起きる努力は必要なんじゃない？」

彼の向かいに腰を下ろし、隣の椅子にバッグを置く。「いやあ、いつもいつも申し訳ないとは思っているのですよ？ ただね、ある意味こればかりは意識がなくなっている状況なので仕方がないと言いますか……」

瑛君がおちやらけた感じで頭を下げる。

「なんか毎回同じこと聞いてるような気がするんだけど」

棘を含んだわたしの言葉に彼が窓の外に視線を移す。反省の色なしと判断を下して、わたしは彼にさらなる追い打ちをかけた。

「ねえ、瑛君」

「なに？」

「もしかしてたばこ吸ってきた？」

「ああ、うん。やっぱりちよつと臭う？」

瑛君が自分の左手を鼻に近づける。

「うん、なんかウンコ臭いよ？」

「いや、ウンコ臭くはないですよ？ たばこ臭いんだと思いますよ？」

一生懸命否定する彼の姿に頬がゆるむ。

あわてふためく彼を見るのはわたしの楽しみのひとつなのだ。

「いいんじゃないかな？ 優里は文章書くのがうまいんだし、試してみなよ」

遅めの昼食のオムライスを食べながら瑛君に恋文賞のことを話すと、そんな返事が返ってきた。自分にとっては結構悩んでいることなのに、コーヒー片手に軽く答えられてしまい少しだけムツとする。

「またそんな簡単に言う。わたしラブレターなんて書いたこともないし、それなのにお母さんが面白がつて勝手にひとりで盛り上がっちゃってるし」

「でも、優里だってそんなに嫌じゃあないんでしょ？」  
期せずして自分の心を言い当てられ、面食らうわたしの目の前で瑛君が目尻を下げる。

「え、でも……」

「べつに隠すことじゃあないでしょ。それに優里の書くラブレター、俺は読んでみたいな」

「魂胆はそっちですか」

昼食で頼んだオムライスをつつきながら苦笑いする。

「瑛君こそなにかのコンクールに出てみたりはしないの？」

「俺のオルガンは趣味みたいなもんだし、もう習慣だから続けてるっただけだよ」

「ふーん、もったいないな」

小さい頃から教会でオルガンを弾いているためか、前に何度か聴いたことのある瑛君の演奏はとても上手だった。あまりにも上手だったので音楽関係のサークルにでも入ったらいいのにと、彼に言ったことがある。

「でも、意外だったな」

瑛君の細長い指先を見つめていたわたしは、視線を上げ、何が、と尋ねる。

「優里はあんまり人とは話しながらないタイプだから、告白とかラブレターでやってたのかと思ってたよ」

「確かに、直接告白っていうのは今までないわね。そもそもこつちから告白したこと一回しかないし、そのときだって携帯でメールだったし」

でもいくら口下手だからといって、わたしも含め今どき手紙で告白は誰も shouldn't と思う。こんなことを思うのは自分だけなのかもしれないが、ともすればラブレターは直接言葉で想いを伝えるよりもハードルが高いんじゃないだろうか。

「へー、そうだったんだ。ちょっとそいつのこと今からシバきに行つてきますらあ」

「はいはい、座って座って」

オムライスの隅っこにある紅しよがをすくいながら立ち上がる彼をなだめる。

「そもそもラブレターって何を書けばいいのよ？」

「そりゃあ、ラブっていったら恋愛の愛でしょ」

「意味わかりません、適当なことを言わないでください。

……やるからには最高のラブレターを書いてみたいんだから」

「やっぱり。だと思った」

「え？」

「だってそうでしょ？ のんきにオムライス片手に相談してくるなんて、優里はもうその恋文賞に出す気でないでしょ」

微笑みを浮かべ見つめてくる瑛君の言葉にわたしは紅しようがをこぼしそうになった。

ずっと、不思議に思っていることがある。

このオムライスにはどうして紅しようががついているのだろうか。

\* \* \*

水色のソファはよほど高価なものらしく、体重の軽い

はずのわたしが座っても身体が深く沈んだ。

あの後、講義のあった瑛君と別れ、わたしはひとり瑛君の家に来ていた。わたしと違って一人暮らしをしている瑛君のアパートの合鍵をもらったのは一昨年のことだった。それ以来大学が早く終わる日には、こうして彼の家で時間をつぶしてから自宅に帰っている。

瑛君の部屋には学生にしては少し変わった物が沢山ある。それは今座っているソファだったり、使い古された聖書だったり、壁に掛かった有名な画家の絵だったり様々だ。わたしはそのどれか一つでも持っている友達を知らない。

瑛君はもう何年もこの部屋に住んでいるらしい。この部屋にあるものは彼が何年もかけて少しずつ集めてきたもので、彼の人生の何分の一かがここにあるのだと思うと、胸が高鳴る。

今、わたしが瑛君にラブレターを渡すとしたら一体どんなことを書けばいいのだろう。

ただ好きという気持ち言葉をにするのは少し違う気

がする。わたしが彼にラブレターを書くなら、それがどんなものか分からないけれどもっと違った気持ちを書くんじゃないだろうか。

そういえば、と中学生のときに担任の先生がテストの解答用紙は先生に向けたラブレターですと教えられたことがあるのを思い出して、わたしは薄い息を吐き出した。

瑛君が学校から帰ってくる時間に合わせて夕飯のシチューを煮込んでいると、エプロンのポケットの中でスマートフォンが震えた。取り出してみると姉からの着信だったので、火を弱めて電話に出る。

「もしもし、お姉ちゃん？」

『あ、もしもしゆう？』

久しぶりに聞く姉の声は普段と比べてひと際明るく、彼女の性格から考えるとわたしは嫌な予感がした。わたしが瑛君をいじめて楽しいのと同じように、昔から彼女はわたしをからかっては遊んでいた。

『久しぶりだねえ。元気にしてた？』

「うん、お姉ちゃんは？」

『元氣元氣』

「どうしたの、突然？　もしかして赤ちゃん生まれただ？」

そんなわけないと知りつつも姉に尋ねてみる。

『違うわよ、もうそろそろだけどまだ。そうじゃなくて、お母さんから聞いたんだけどゆうがラブレター出すって本当なの？』

「違う。まだ出すって決めてない」

『え、出せばいいじゃない。ゆう大学で文芸サークルに入ってるんでしょ。ちようどいいじゃない。子供るときから作文で賞取ったりしてたし、ゆうならいいラブレター書くとと思うんだけどなあ』

それにゆうのラブレターお姉ちゃんも読んでみたいし、と続ける姉の言葉を聞きながら鍋をかき混ぜる。

「それとまったく同じことを今日言われました」

『もしかして瑛君？』

どうして分かったのだろうと内心驚きながら、いい感じにとろみのついたシチューの味をみる。

「うん。そもそも賞に送るラブレターって誰に向けて書けっというのよ」

『なに恥ずかしがってんの。そんなもん瑛君へゆうの想いを赤裸々に綴ればいいにきまつてんじゃん』

「赤裸々である必要はないと思う。それにお姉ちゃんだったら大智さんへのラブレターなんて書く？」

アドバイスをくれる姉にそう尋ねると、彼女は旦那にラブレターなんて絶対無理と笑って答えた。

「ねえ、お姉ちゃん。予定日って来週だったよね？」

『ええ、そうよ。来週にはわたしはお母さんになって、ゆうは叔母さんになるの』

「嬉しそうな声しちゃって。お姉ちゃん恋してるみたい」

『まあね』

「赤ちゃんの写真送ってね」

『了解。落ち着いたら実家にも戻るから』

「うん、わかった」

火を止めて、じゃあねと電話を切る。久しぶりの姉は幸せそうで今彼女がどんな顔をしているのだろうか、とわたしは少し羨ましく思った。

「あ、赤ちゃんの名前決めてるのか聞いてくんだった……」

姉の妊娠を知らされたのは去年の夏のことだった。母にせがまれ、お盆休みに瑛君をわたしの家に連れて来て家族と一緒に過ごしていたとき、ちょうど彼女からの連絡がきたのだ。そのとき電話に出たのは父で、父は受話器を持ちながらわたしたちに見えないように小さくガッツポーズをしていたのをよく覚えている。

瑛君と二人で夕飯を済ませ時間つぶしに彼のデスクの上を整理していると、わたしは沢山の譜面の中にタイトルのないものを見つけた。他の譜面はちゃんとした本に印刷されているのだが、この譜面だけは三枚の紙に直接手書きで書かれている。

「瑛君、これって……?」

こたつに入って本を読んでいる瑛君に譜面を見せる。小説から目を離れた彼は、なぜかバツが悪そうに身動きをして携帯音楽プレーヤーをリュックサックから取り出してみせた。

「サティだよ」

そう言って片手でプレーヤーを操作しながら空いている方の手でわたしにイヤホンを差し出してくる。

わたしがイヤホンを耳につけたのを確認してから、瑛君がまた指先を動かす。

「たぶん優里も聞いたことのある曲だと思うんだけど」

わたしがうなずくと瑛君は立ち上がって、本棚から一冊のスコアブックを抜き取った。表紙を見た限りまだ買ったばかりらしいスコアブックだというのに、瑛君が開いたページには沢山の文字や音符がシャープペンで書き込まれている。

「教会の子に頼まれちゃってね、今子供でも弾けるように編曲しているんだ。ドビュッシーのままだと難しすぎ

るだろうから」

音楽に疎いわたしだったが、イヤホンから流れてくる曲にはどこか聞き覚えがある。

「へー、この曲がサティっていうんだ」

「違うよ、サティは作曲家の名前。この曲はジムノペディっていうやつ。……あれ、興味ない?」

「まあまあかな」

「そっか、ならいいや」

ジムノペディとやらを聴きながら瑛君にスコアを返す。

「でもなんでそんなことしてんの?」

「頼まれたんだよ。ラブソングを弾きたいんだってさ」

「ふーん、これラブソングだったんだ」

わたしの言葉に違うよ、と答えると瑛君はプレーヤーの曲を止めた。

「どういうことなのよ?」

「ラブソングじゃないけど、俺の中ではマイベストラブ受賞作だから。純真無垢な子供に布教しようと思って」



そう言って瑛君はこたつの上に並べたままになって  
いた食器を片付け始める。

「よくわかんないけど、いい曲だね」

「でしょ？」

ひとつに重ねた食器をキッチンまで運び蛇口をひね  
ると、ふいに瑛君はこちらを振り返った。

「今度の休み、デートしない？」

水の流れる音が聞こえてくる中、わたしの耳にはまだ  
サティが残っているような気がした。

\* \* \*

日曜日の朝、枕元で鳴り響くアラームの音でわたしは  
目を覚ました。身体じゅうを覆う気だるさに抗いながら  
身を起こすと、ベッドから猫のぬいぐるみのフミさんが  
ころんと落ちる。おはようございますフミさんと、心の  
中で呟き四本の足をぴんと伸ばしたまま仰向けになっ  
た猫を抱え上げる。ずっと抱いて寝ていたのだろうか、

フミさんはじんわりとぬくい。

アラームのスヌーズが働かないようにスマートフォ  
ンの設定を素早く変え、わたしは夜中に届いたらしいメ  
ールを開いた。

『明日三時ごろ、駅まで迎えに行くから』

瑛君からのメールに『了解』と返信し、フミさんをベ  
ッドの脇に放り投げる。

先日、瑛君は彼が昔住んでいた教会に連れて行ってく  
れると言っていた。瑛君は今でもその教会に行くらしく、  
たまに子供達にオルガンを弾いてあげている。最近はお  
ルガンの弾き方も教えているようで、彼は自分でオルガ  
ンを弾くよりも教え子が弾いてるところを見るほうが  
楽しいよ、と笑っていた。

瑛君自身もまだ小さかった頃、当時一緒に教会で育っ  
た年上の女の人にオルガンを教えてもらったらしい。

彼はそのお姉さんの演奏が始まるといつも、他の子達  
と遊ぶのを止めてオルガンの横でひとり体育座りをし  
て聴いていた。そしていつしか二人は仲良く並んで鍵盤

を叩くようになり、今では彼がオルガンを弾くようになったのだ。

瑛君はよく子供の頃のその思い出を幸せそうに話す。彼にとつてオルガンの音は宝物であり、女の人のことを実の姉や母のように慕っていたのだろう。

電車から降りると街には遅い雪がちらついていた。ホームを抜け改札を通ると、雪をうつすらとかぶったロータリーが一面に広がる。

「ごめんね、待たせちゃった？」

ロータリーの近くに設置された電話ボックスに持たれかかっていた瑛君を見つけ、わたしは顔の前で両手を合わせた。コートの肩の濡れ具合からして、彼がここに着いてからしばらくたっているのだろう。

「まあ、ちよつとね。けど、いつもはこっちが待たせちゃってるからこのくらい全然平気だよ」

「雪、いつ頃から降ってるの？」

「昼過ぎくらいからかな。今日はずっとある程度降った

らちよつと止んで、また降り始めるの繰り返し」

手をかざしてみると小さな雪の粒が、ひとつひとつ手のひらに落ちては消えていく。空を見上げると、灰色雲がずっと上のほうでゆっくりと風に流され動いているのが見えた。

「もう春なのにね」

わたしのその眩きに瑛君は、上を見て歩いてたらこけちやうよ、と言ってわたしの手を温めるように握り締めた。

行く先を告げぬままの瑛君について行くと、住宅地を抜けたところで、彼は小さな建物の前で立ち止まった。正面に大きな扉のある洋風の建物の屋根に、十字架が立てられていることから教会なのだろうと、わたしは思った。

「ねえ、もしかしてここ……」

「うん、そうだよ。俺が昔いたところ」

少し恥ずかしそうに瑛君は微笑み、わたしの手をひい

て建物の裏手にまわった。

「え、ちよつと。あつちから入るんじゃないの？」

「いや、あそこは礼拝堂だから。普段みんながいるのはこの裏にくつついてる建物だよ」

瑛君の言葉通り、教会の向こう側から子供達の遊ぶ声が聞こえてくる。きゃっきゃとはしゃぎ回る声の中に、ひとり大人も混じっているようだ。

「もお、変なところに飛ばさないでよお」

建物の影から目の前にボールが転がってくる。地面を柔らかく跳ねる球体は小学校の体育の授業で見たことのあるソフトバレーボールだった。

そのボールを追いかけてきたのだろう、息を切らしながら髪を後ろでまとめた三十代ほどの女性が現れる。

「どうぞ、彩子さん」

瑛君が先ほど転がってきたボールを女性に手渡す。

「ああ、どうもすみません——あら？」

突然現れた瑛君に驚いた様子の彼女に、瑛君は恥ずかしさを隠すように自分の頭に手を置いた。

「こんにちは。遊びに来ちゃいました」

教会で働いているという彩子さんに連れられ、わたしは礼拝堂を訪れた。スタンドグラスから差し込む光が正面にそびえる聖母像を照らしている。その傍らで使い込まれた焦げ茶色のオルガンが置かれてあるのを見つけて、わたしは頬を緩めた。

礼拝堂には先ほどまで彼女と共に庭を駆けていた子供達が、礼儀正しく長椅子に腰掛け両手を顔の前で組んでいる。頬に傷を作った少年も長い髪を桃色のゴムで留めた少女も変わらず、皆様に顔をうつむけている。

瑛君はというと、あの後すぐに子供達の輪にまざり、今も彼らと一緒に静かに手を顔の前で組んでいる。

「瑛がここに彼女を連れてくるなんて、思ってもみなかったわ」

祈りをささげているらしい子供達の後姿を眺めながら、彩子さんは小さな声でわたしに言った。

「あなたはここシスターさんなんですか？」

「違うわ。私は保母みたいなものなのかな。ここに住み込みで子供達の世話をしているの」

わたしはなんとなく、瑛君と同じように彼女もここで育ったのだらうと思っていた。もちろん、そのことを彼女に確かめはしなかったけれど。

「やっぱり、大変ですか？」

「まあね。でも、あの子達を放ってはおけないから」

わたしの質問に答えた彼女の声は羨ましいほど透き通っている。

「私はみんなが大好きなのよ。あなたは子供は嫌い？」

彼女にそう尋ね返され、わたしは目の前に座っている少年の背中をじっと見つめた。

身に着けているTシャツには小さな泥跳ねが点々とついており、活発な子なのだらうなと想像できた。小さく丸い肩は小刻みに揺れていたが、それでもわたし達や彩子さんの手前一生懸命おとなしくしようと努めているのだらう。

「嫌い、ではないです。たぶん、苦手だとは思いますが」

ど」

「じゃあ私と同じだ」

隣りに座る彩子さんが微笑む。

「私も正直子供の世話は疲れるし、得意なわけじゃない。私と同年代の人みんな、お洒落をして結婚もして普通の幸せな家庭を持っているのにつて羨ましく思っているわ」

でもね、と彼女は続ける。

「私は、あの子達のこと大好きなのよ。私はみんなのお母さんだから」

ステンドグラスから差す光は、いつしか彩子さんの横顔を照らしていた。

「綺麗ですね」

わたしの言葉に彼女は子供達を見ながらそうでしょう、と答える。

「瑛君も、自慢の子供なんですか？」

「ええ。でもさすがに、瑛にお母さんって呼ばれると思うと腹が立つけどね」

棘のある彼女の言葉の意味するところにたどりつき、わたし達は顔を見合わせ声を立てずにしばらくの間笑い合った。

\* \* \*

子供達の礼拝が終わった後、わたしは瑛君と二人きりで教会の中に残っていた。わたし達以外誰もいない礼拝堂は静かだったが、わたしにはそれが不思議と心地よかった。

夕暮れの礼拝堂は蜂蜜を溶かしたように黄金色に染まっている。

「ねえ瑛君？」

「ん？」

「弾いてみてよ」

礼拝堂の隅に置かれたオルガンを指差すと、彼はいいよ答えた。

木椅子に座り彼の細長い指が鍵盤に触れる。

「リクエストは？」

「じゃあこの前聴いたサテイで」

「ジムノペディね。楽譜がないからあやしいところは適当に弾くけど、いい？」

「うん」

瑛君がオルガンに触れたまま深呼吸をする。その様子を見て、わたしはそっと目を閉じた。

彼女達の、慈愛に満ちた横顔を思い浮かべながら。

きっとそれが世界で一番の愛なのだ、そんな気がして、気がつけば、晴れ間から春が訪れていた。